

ウィズ・コロナ時代の海外調査 —イギリスの場合

小澤 一郎 立命館大学文学部 准教授

本稿では、私が2022年8月末から9月上旬までイギリス・ロンドンで行った史料調査について報告したいと思います。今回の調査は、現在の研究テーマである19・20世紀転換期におけるアフガン人(パシュトゥーン人)の武器交易活動にかかわるこれまでの史料調査を保管するとともに、新たなテーマを模索することを眼目としていました。以前の調査は2020年2月、日本における新型コロナウイルスの流行直前の時期でしたから、約2年半ぶりということになります。

出発の時期はちょうど新型コロナウイルスにかかわる日本の水際対策が緩和された時期で、既に入国制限を完全撤廃していたイギリスへの入国には特別な手続きは必要なく、また日本への帰国についても、9月7日(帰国予定日の2日前!)から三回目のワクチン接種者は入国に関する制限がほぼ撤廃されるという、何とも幸運なタイミングとなりました。数か月

前にポルトガル・ポルトで学会発表を行った際には現地でのPCR検査が必要で、手続きの煩雑さよりも現地で陽性になったら帰国できないという緊張感の方が重くのしかかっていたことを考えれば、隔世の感すらありました。

今回は大英図書館と国立公文書館で調査を行いました。調査を開始するにあたってまず、利用証を更新する必要がありました。両館とも更新の際には顔を確認できる証明書(外国人の場合はパスポート)とともに住所を確認できる英文の証明書が必要とされますが、日本人の場合、パスポートに住所が記載されていないためこの目的では利用できず、日本人研究者にとっては懸案となっていました。このため、英文の証明書を用意できない研究者はこれまで、大英図書館では日本の地方自治体が発行する日本語の住民票を提出し、日本人のキュレーターの方にお出ましいただいて確認してもらう、というような若干煩瑣な手続きを行うこともありました。ここで助かるのが、銀行から発行してもらえ英文の住所付き残高証明書です。今回私はこれを利用することで、大英図書館でも国立公文書館でも更新手続きをかなり容易に進めることができました。この証明書の発行は有料で時間もかかりますが、もしイギリスで調査を行われる場合は事前に準備しておくことをお勧めします。

具体的な調査内容は以下の通りです。

大英図書館ではセント・パンクラスの本館のアジア・アフリカ研究閲覧室でインド省資料(India Office Records)の調査を行いました。この資料は、イギリスのインド統治にかかわる、主に英文の膨大



写真1 大英図書館(著者撮影)

な史料を含んでおり、インドのみならず周辺地域を研究する際にも重要なものです。今回は、前回調査で閲覧しきれなかった1910年代のアフガン人の武器交易に関する史料を補完的に調査したほか、今後の新たな研究の展開を見据え、複数のテーマについて予備的な調査を行いました。なお、アジア・アフリカ研究閲覧室では数年前から研究者自身のカメラでの資料の撮影が許可されており、調査はかなり楽になってきています。

具体的には、まず移動民・交易者としてのアフガン人という問題にかかわる、1920年代から1940年代にかけての複数の資料を収集しました。アフガン人にはポーウィンダと呼ばれる移動交易民がおり、古来から超地域的な交易活動を行ってきましたが、近代以降については彼らの活動に学術的な関心が寄せられることはあまり多くなかったといえます。今回は英領インド当局が国境を越えてアフガニスタンとの間を行き来するアフガン人たちにどのように対処していたのかを示す史料を収集することができました。あくまで管理する側の視点からという限定付きですが、これを利用して、史料に残りにくいアフガン人たちの交易活動の実相を明らかにすることが期待されます。

また、現在のイランとパキスタンにまたがる海岸地帯であるマクラーンにおいて近現代に展開された交易・交流にかかわる史料も調査の対象としました。現在私が研究テーマとしている19・20世紀転換期のアフガン人交易者たちも、アフガニスタン方面からマクラーンまでやってきて、ペルシア湾方面から運ばれてくる武器を購入したり、あるいはこの地域を經由してペルシア湾を渡って武器を買い付けたりと、マクラーンは彼らの交易の主要な舞台となっていました。また、この地域はアフガン人だけでなく、現地の人口の多数派となっているバルーチ人など、様々な人々

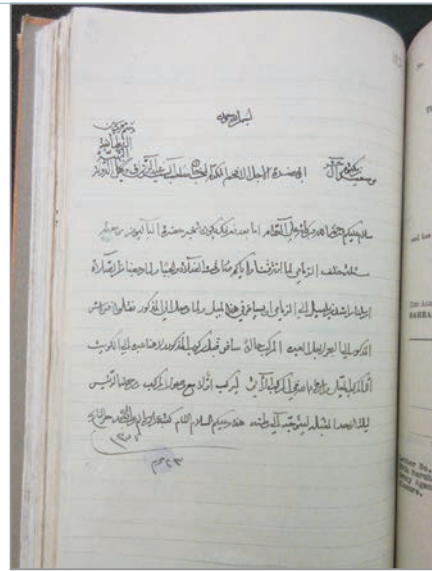


写真2 ドバイの支配者サイド・ブン・マクトゥームからイギリス側への書簡 (IOR/R/15/2/162; 著者撮影)

が入り混じりながら交易と交流を繰り返してきていました。今後は武器に限らず、この地域の交易・交流の総体を見据えた研究を行っていくことが必要とされますが、これに関連して、今回はマクラーンで行われていた奴隷交易にかかわる史料を収集しました。マクラーンのバルーチ人は20世紀初頭以降、同じバルーチ人でも社会的に下層に位置する人々を捕らえ、奴隷としてペルシア湾岸地域に輸出していました。19世紀半ばから世界規模で奴隷交易・奴隷制の廃止運動を展開していたイギリスは、マクラーンでも奴隷交易への対応を求められることになったのですが、この過程でイギリス当局による史料が残されたのです。今回収集できたのは1920年代から30年代にかかわる史料群であり、奴隷交易の諸相を詳細に明らかにすることができる可能性を持っています。また史料中では、奴隷交易への現地のバルーチ人有力者の関与や、奴隷交易とペルシア湾地域の高海賊の活動との関連も示唆されており、交易・交流と地域の政治・社会状況とを結びつけて研究することもできると考えられます。

今回の大英図書館での史料調査で印象的だったのは、英文の史料に交じってアラビア語・ペルシア

語などの史料も散見されたことです。アラビア語の史料としては、英領インド政府の下でペルシア湾岸地域におけるイギリスの利害を代表していたペルシア湾政務駐在官に対して、ペルシア湾岸各都市に配置されていた現地人代理人が送った報告書や、現地支配者からイギリス側への書簡（写真2）を発見できました。また、ペルシア語の史料としては、先述の奴隷交易関連文書の中に、マクラーンのパルーチ人有力者がイギリス当局との間に締結した合意の文書（写真3）が含まれていました。こうした報告書は通常英語の翻訳とともに収録されており、研究では現地語の文面は等閑視されることが多いのですが、通常の翻訳では省略される文頭・文末の定型文や、使用されるそれぞれの現地語の術語には、英語翻訳版には現れない情報が含まれています。英語資料中に含まれるこうした現地語文書は、これまでにまとまった研究がなされたことがありません。イギリスと現地人とのかわりや翻訳・伝達の問題を考えるうえで、興味深い題材を提供するものとなるでしょう。

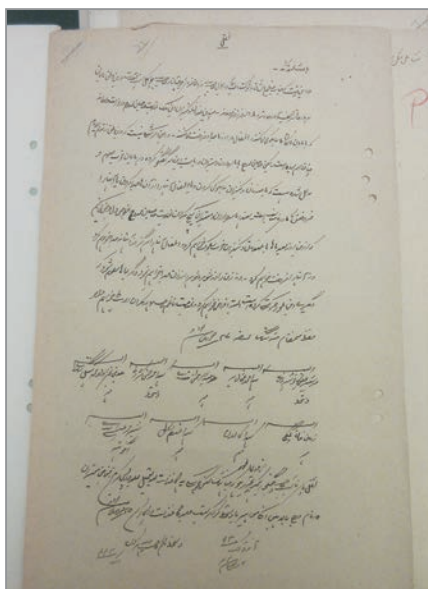


写真3 マクラーンの有力者とイギリス当局の合意書（IOR/R/1/34/34；著者撮影）

国立公文書館では、主に外務省関係の史料の調査を行いました。なお、国立公文書館でも閲覧者自身による資料の撮影が許可されています。こちらでも大英図書館と同様、1910年代のアフガン人の武器交易に関する史料を補完的に調査したほか、新たな研究テーマを模索すべく、予備的な資料調査を行いました。

国立公文書館で注目すべき史料は、1880年以降のアフガニスタン国外のアフガニスタン国民に対する保護の問題を扱ったものです。アフガニスタン国民の保護に関する文書がイギリスに残されているのは一見奇異に思えますが、ここには近代アフガニスタンの歴史がかかわっています。第二次アングロ・アフガン戦争（1878-1881）でアフガニスタンに軍事介入したイギリスは、王族の一人アブドゥッラフマーンと交渉し、イギリスがアフガニスタンを保護国とするのと引き換えに彼の国王としての即位を認めました。その後、1919年までアフガニスタンは外交権を失うことになったのですが、これは単にイギリスがアフガニスタンの外交関係を指導するというのみを意味したのではなく、この時に国外のアフガニスタン国民の保護義務もイギリスに移ることになったのです。今回収集した史料には、イギリス側がオスマン帝国と中国のアフガニスタン国民をいかに扱ったかという問題に関する文書が含まれています。これらの史料は、保護国という枠組みが有効性を持っていた時代において、国家による個人の把握や、国家間関係の変化による国外の個人の活動のあり方の変容といった問題を具体的な事例から明らかにする可能性を秘めているといえます。

調査中、現地ではご多分に漏れず、人々はほとんどマスクを着けておらず、私自身も最初のうちは着用していたものの、調査期間の大半はノーマスクで



写真4 国立公文書館（著者撮影）

過ごしていました。気候も、猛暑であった日本とは対照的に、涼しいというよりは肌寒いくらいであり、快適に過ごすことができました。また、滞在最終日の9月8日にはエリザベス女王の体調不良の一報に空港で触れ、機内で女王の訃報のニュースを目にするなど、研究以外でも印象に残る調査旅行となりました。

今回の調査では様々なテーマにかかわる史料を収集しましたが、あまりに多様過ぎて多少收拾がつかなくなっている感もあります。今後、関連する研究のサーベイを行いながら新たな研究テーマを見極めていきたいと思っています。

【著者プロフィール】

小澤 一郎（おざわ・いちろう）

立命館大学文学部准教授

学位：博士（文学、東京大学）

専門：西南アジア交易・交流史、
西アジア軍事史



主な業績：「海を渡るアフガン人：一九・二〇世紀転換期のオマーン湾沿岸地域におけるアフガン人の交易活動」『立命館史学』41、2022年、95-120頁。「19世紀末イランの兵員徴用と社会：イラン・イスラーム議会図書館所蔵『歩兵徴用簿』の検討から」『オリент』62-1、2019年、13-32頁。「露土戦争（1877-78）による小銃拡散と「武装化」：火器史の「近代」の解明に向けて」『日本中東学会年報』32-1、2016年、119-148頁。